

令和 7 年 6 月 16 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K02280

研究課題名（和文）主体的エンパワメントの可視化：多様な声と場所をめぐる外国人生徒との批判的実践研究

研究課題名（英文）Visualizing subjective empowerment: Critical practice-based research with foreign students on diverse voices and places

研究代表者

小林 聡子 (Shao-Kobayashi, Satoko)

千葉大学・大学院国際学術研究院・准教授

研究者番号：90737701

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,700,000円

研究成果の概要（和文）：本実践研究は、トランスナショナルな状況下で生きる子ども達が、調査者とともに、自分の置かれている環境や状況、アイデンティティや居場所についてアクティブな行為主体として捉え直し、「主体的エンパワメント」につなげていく様子を可視化することを目指した。研究期間中、フリースクールや学校に在籍する外国につながる子どもや若者と、メンタルマップや写真を用いたワークショップを実施した。この実践研究を通して教育行政関係者ら及び海外研究者ともネットワークを構築し、不安定な状況の中で日々を生きる子どもや若者と共に行う研究の課題と展望について、国際学会や書籍・論文、教員研修や行政会議などの場で成果を還元した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、国内外で様々な外国人児童生徒教育に関する調査研究が行われてきたが、近年では、研究者がどうその場に関わるのかという関心が高まっている。中でも、本研究は「研究・支援する大人」と「研究・支援される子ども」というダイナミズムの変容を試みる中で明らかになった課題や可能性を示すものとして、教育学研究での命題でもある理論と実践を有機的につなぐための示唆となりうる。また本研究を通して、子どもや若者に継続的に寄り添いながら、学校や地域とのネットワークを丁寧に構築し、教員研修等でその認知的・構造的変化にも寄与することができたことは、大きな成果の一つであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This critical action research project with migrant children and youth aimed to visualize the way in which they (re)recognize and (re)interpret their everyday environment, sense of belonging and identities as active agents, leading to build self-empowerment. During the research period, we conducted visual workshops using mental maps and photographs with migrant children and youth at freeschool and public schools. We actively established network with schools and local education departments, and international scholars in the similar fields. Furthermore, the outcomes and insights regarding the challenges and prospects of conducting research with migrant children and youth were shared through international conferences, books and journal articles, teacher training sessions, and administrative meetings.

研究分野：教育人類学、言語人類学、異文化間教育学

キーワード：外国につながる子どもと若者 居場所 参加型アクションリサーチ フォトボイス 実践研究

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初、文部科学省(2018)の発表によれば日本語指導が必要な外国籍・日本国籍児童生徒は10年間で*1.7倍増加し、かれらの退学率の高さ、進学率の低さが顕在化していた(*2024年度データでは10年間で1.9倍)。2019年6月に施行された「日本語教育の推進に関する法律」など、法の後押しをうけて各自治体にて日本語教育の拡充が進められているが、子どもや若者が直面する教育的課題の要因は日本語習得や教科内容の理解の問題だけでなく、学校や地域での「所在のなさ」や人々とのつながりの希薄さにもある。

従来、このような課題に取り組む活動の多くは、子ども達をあくまでも「支援される側」とみなしてきた。また、日本語指導が必要な外国人児童生徒教育をめぐる研究分野において、子どものエンパワメントが重要だと論じられながらも、子どもは「支援される側」であり「研究される側」として受動的に位置付けられてきた。そこで、持続可能な共生社会の実現を念頭に先述の課題にアプローチするのであれば、従来の「マジョリティがマイノリティを支援する」「研究者が子どもを研究する」という構図が必要以上に強化されるのではなく、子ども達自身が自らの置かれた立場を批判的に捉え直し、共に社会現実を編み直していくための支援や仕組み、手法が必要だと考えた。

「エンパワメント」の概念は、それぞれの子ども「所与の力を開く」ことを意味することから、そもそも行為者の主体性を中心とした概念である。「研究のための研究」ととどめるのではなく、子ども達と共に学校や地域、家庭における教育的・社会的課題を丁寧に捉えながら、教職員および地域住民らとの理解や連携を強化する具体的なアプローチを提示したい。これが、本研究の着想に至った背景である。

2. 研究の目的

本実践研究は、国際移動する言語的文化的に多様な子ども達をアクティブな行為主体として捉え、アイデンティティや居場所について共に捉え直し、可視化しながら、主体的なエンパワメントの形成につなげていくことを目的とした。

特に、移動する子ども達の多様な声と彼らを取り巻く複層的な場所に着目し、千葉のフリースクールで学ぶ中学から高校への移行期にある外国につながる生徒達らと「子どもによる参加型アクションリサーチ(Youth Participatory Action Research [YPAR])」を試行した。フィールド調査やマップなどの媒体作成を通して、故郷や今の生活環境に関する認識を内省・表象・分析するプロセスを追うことで子ども達の中長期的変容を可視化し、変化の起こり方やその意味を、研究者と子ども達が共に理解する手立てを探ることを目標とした。

3. 研究の方法

本研究の主な参加者は、アフガニスタンや中国、スリランカやイランなどから来日し、フリースクールで日本語を学ぶ16歳から20歳の12名である。YPARの枠組みを援用し、2021年度より様々な企画を通して研究者・大学生・子ども達との間に関係性を構築しつつ、故郷や今の生活環境、そしてアイデンティティや居



場所をメンタルマップや写真を通して可視化するワークショップを行ってきた（右図）。2023年度からは、「声に出して読む多言語フォトブック」の作成を目標に掲げて子ども達と企画会議をしたり、参加者とのカメラワークショップを実施したりと、やりとりを進めた。

また、フリースクール（元）生徒らとの活動のほか、2022年度から千葉県内で外国人児童生徒が多い公立小学校 A で 4 回、県立高校 B で 3 回、同様のワークショップを実施している。

これらの実践を通して、それぞれの場所や視点から居場所を可視化し、それを他者と共有しながら振り返ることで、中長期的に子ども達自身が自分たちの変化をどう捉えるのかを明らかにしようと試みた。また、元フリースクール生と学校でのワークショップという異なるコンテキストを比較することで、異なる YPAR 研究の場での相違点の背後にある社会的要因や構造、今後の YPAR 研究の展開の可能性及び課題を、協力者である北南米の YPAR 研究者からフィードバックを受けつつ検討した。

4. 研究成果

本実践研究の成果は、当初の予定通りにプロジェクトが進んだのではなく、進まなかったことにより得られた知見が際立つ。

子ども達と行う PAR の方法論的可能性

一つ目の成果は、子どもたちと共に行う PAR の方法論的課題と、その可能性を提示できた点である。中学卒業後に来日し、高校進学を目指してフリースクールに通っている外国につながる子どもたちの多くは、家族の世話や仕事の手伝いをしながら、スクールと家の往復という忙しい日々を送っていた。教育制度の狭間に置かれ、見落とされがちな彼らの声を聞き、それを描き出すことを目指して本プロジェクトは始まったが、プロジェクトへの参加そのものが、子どもたちにとって息抜きにもなりうる一方で、時には新たな負担ともなり得た。

特に、フリースクールを卒業して異なる高校へと進学した後は、新たな環境での生活が始まり、さらに多忙な日々巻き込まれていった。そうした中で、ワークショップに参加するには、彼らの日常的な動線から離れて、日程を調整して集まる必要があった。これは、彼らの「参加したい」という思いとは裏腹に、参加を困難にする大きな要因となっていた。その結果、研究助成期間内にフォトブックを完成させることは叶わなかったが、こうしたプロセス自体が、PAR の方法論的課題と、それでもなお取り組む意義を明らかにしたといえる。

一方で、学校内で実施したワークショップでは、比較的スムーズに成果物を出すことができた。そこには子どもたちが日常的にいて、教職員との協働も可能だという環境的要因が大きく影響している。従来、国内外の PAR の多くは、NPO や教育・福祉系の組織を基盤に実施されてきたように、調査を共に行い、成果を共に創り上げ、最終的にソーシャルアクションにつなげることを目指す「従来の PAR」には、適した環境とそうでない環境がある。今回の実践を通して、そうした実施の可否にかかわる子どもたちの生活状況や、背景にある構造的課題が明らかになった。

また、研究者自身も PAR の趣旨とは裏腹に、「成果が出やすい対象」へと無意識に向かってしまいそうになる。しかし、本来耳を傾けるべきは、システムや支援の網からこぼれ落ちている子どもたちの声であり、彼らと共に変化を志向する姿勢が求められる。

本研究を通して、子どもたちの置かれた社会的・生活的文脈を踏まえた上で、従来の「成果」概念にとらわれすぎない、プロセスの意味や価値に重きをおいた、オルタナティブな PAR のあり方を提示できたと考える。

(本成果については、2023,2024年度の国際学会にて部分的に発表した。また、現在執筆中の論文にて公表予定)

関係的なエンパワメントへ

本研究の成果の二点目は、「エンパワメント」という概念の実践的な再検討である。エンパワメントとは、子ども一人ひとりの「所与の力を開く」ことと定義されているが、研究開始当初は、それを子ども自身がどのように認識しているかが重要だと捉えていた。しかしながら、子どもたちと共に本研究を検討していく中で、単に自分たちの声や居場所を可視化するだけでなく、プロジェクトに参加しなかった子どもがそれを読むことで、その子どもたち自身のエンパワメントにもつながるような成果物が求められていることが明らかとなった。その結果、「声に出して読む多言語フォトブック」の作成を最終成果物とすることを目標に掲げるに至った。

当初は、大学生と共に自己を振り返るワークショップとして始まった取り組みであったが、それが、誰かに向けて自分たちのアイデアを表現するためのワークショップへと発展した。この変化は、参加した子どもたちにとって、個人的な体験が社会的な意味を持つものへと転換する経験にもなった。また、自分が何をどう認識しているのかを深め、その価値や意味を見出し、「所与の力を開く」ためには、実際の人やモノであれ、想像上の読者であれ、他者やモノとの対話・比較・関係性が重要であることも見えてきた。

今後、フォトブックが完成した際には、実際の読者からの反応に子どもたちがどのように呼応するのかを観察し、そこから改めて、子どもたち自身が「エンパワメント」をどのように捉えるのかを検討していきたい。

ネットワークの構築と具体的な変化への寄与

三点目の成果は、ネットワークの構築と具体的な変化への寄与である。本研究では、いわゆる学術的成果を短期間で提示することは困難であった。しかしながら、外国につながる子どもや若者に継続的に寄り添いながら、学校や地域とのネットワークを丁寧に構築し、教員研修等を通じて、その認識的・構造的な変化にも寄与することができた。この点は、本実践研究における最大の成果の一つだと考える。

また、研究期間中はコロナ禍の影響や旅費の高騰により、予定していた海外調査や国際学会での発表が思うように実施できなかった。しかしながら、最終年度にはコロンビアで開催された国際学会(“Encuentros Etnográficos con Niñas, Niños y Jóvenes en Contextos Educativos y Comunitarios Diversos”)に参加し、本研究の協力者や、中南米を中心とした子どもに関わる批判的実践研究者らと、対面での情報交換やネットワーク構築を行うことができた。また、代表者のサバティカル期間を活用してカナダの教育機関における移民児童生徒らやコミュニティにおける共同的な支援についての知見を深めながら、連携できる関係を構築してきた。今後は、関係性をさらに強化しながら国際協働研究として発展させるとともに、日本国内においてもシンポジウムを開催する予定である。実践研究は、その対象のコンテキストに閉じられてしまうことが課題とされてきたが、このように国内外の研究ネットワークと対話を重ねつつ、さまざまな実践事例を検討していくことによって、子どもと行う実践研究のさらなる理論化に貢献できると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小林聡子, 佐々木綾子, 大木圭	4. 巻 8
2. 論文標題 小学校・大学間における遠隔日本語交流活動：「指導」ではないアプローチの模索	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 千葉大学国際教養学研究	6. 最初と最後の頁 161-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S24326291-8-P161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林聡子, 相良好美, 土田雄一	4. 巻 26
2. 論文標題 外国人児童生徒をめぐる基本情報の浸透度合い - 教員と教職課程受講生へのアンケート調査を事例に -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Satoko Shao-Kobayashi, Tomoko Tokunaga, Ayako Sasaki
2. 発表標題 Re-Capturing Our Realities A photobook project with migrant youth in Japan
3. 学会等名 Anthropology of Japan in Japan（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satoko Shao-Kobayashi, Tomoko Tokunaga, Ayako Sasaki
2. 発表標題 Representing the Silence? A photobook project with migrant youth in Japan
3. 学会等名 Encuentros etnograficos con ninas, ninos y jovenes en contextos educativos y comunitarios diversos（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤 郡衛、菅原 雅枝、小林 聡子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 184
3. 書名 子どもの日本語教育を問い直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐々木 綾子 (Sasaki Ayako) (20720030)	千葉大学・大学院国際学術研究院・准教授 (12501)	
研究分担者	徳永 智子 (Tokunaga Tomoko) (60751287)	筑波大学・人間系・准教授 (12102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ゲレロ・ディアス アルバ・ルーシー (Guerrero Diaz Alba Lucy)	Pontificia Universidad Javeriana・Dean, Associate Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------